

# 大極殿院復原のための類例調査

## — 第一次大極殿院の復原研究 3 —

はじめに 第一次大極殿院の諸施設は、発掘遺構や出土遺物の一次資料から上部構造や細部の意匠などは確実にわかることが少ない。そのため、第一次大極殿院の復原研究では、一次資料から確定できない部分について事例研究をおこなっている。対象は、文献資料・発掘遺構・現存遺構・絵画資料等で、復原の参考になりうる奈良時代およびその前後の史資料を収集・検討している。また、東アジア諸国の類例も可能な限り検討に加え、重要な事例に関しては現地調査をおこなっている。

今回は、2010年度におこなった宮殿の現存遺構として、京都御所、平安神宮（復原事例）、故宮（中国）の現地調査の概要について報告する。なお、宮殿遺構の調査において注目した主な視点は、平面計画・内庭部の舗設（舗装・磚積壇・高欄・幢竿支柱・井戸等）・回廊（平面・断面・納まり等）・基壇（規模・階段等）・排水計画・宮殿中心施設の空間構成等である。

京都御所 現在の京都御所は南北朝時代に里内裏の一つであった土御門東洞院殿の地で、それ以後ここが皇居となった。寛政2年（1790）の造営にあたり紫宸殿・清涼殿の一郭が裏松固禪による『大内裏図考証』などをもとに復古された。現在の建物は寛政の形式を踏襲しており、細部は近世の手法になるものの、内部空間は平安時代の内裏の様相をとどめているといわれている。

京都御所では、紫宸殿周辺の内庭部を中心に調査をおこなった。内庭部に中央通路は設けず、全面に敷かれた礫敷は第一次大極殿院の内庭部で発掘された中層礫敷や下層礫敷よりも小さく、径1cm以下であった。

第一次大極殿院は築地回廊形式であるが、現存遺構にはなく、『年中行事絵巻』（以下、絵巻）に描かれる平安宮内裏の回廊が構造形式や意匠の手がかりとなる。絵巻から想定される築地回廊に求められる機能は、高い遮蔽性と、儀礼に相応しい空間と考えられる。京都御所の回廊は複廊形式で、三棟造（柱間ごとに虹梁を架けて、その上に板葭敷を置き母屋桁を支え、天井を張る）ではないため座とするのに相応しい空間とはいいいくいが、棟持柱を用い、壁を棟下まで立ち上げており、遮蔽性は高い。また回廊南面に2カ所（南面中央の承明門を除く）、東西面には

南寄りにそれぞれ1カ所ずつ門を開いているが、いずれも桁行・梁行ともに回廊の柱間と同じであった。

紫宸殿をはじめとする各建物の細部については、様式からみて直接参考とはしにくく、またこれらの建物は柱が高く、縦長のプロポーションであり、これが古代まで遡ることができるか検討が必要である。

平安神宮 平安神宮は、明治28年（1894）京都で開催された桓武天皇平安遷都1100年記念祭の記念殿建設を契機として創建された桓武天皇を祀る神社である。伊東忠太ほかにより、平安宮八省院を模して大極殿周辺と応天門などの一部を8分の5に縮小し設計されている。大極殿、蒼龍楼・白虎楼、応天門など平安時代の八省院を模してつくられた社殿は創建時のものである。

平安神宮では近代の復原事例として、大極殿周辺の内庭部を中心に調査をおこなった。内庭部に中央通路は設けず全面礫敷であり、礫は京都御所と同様に径1cm以下であった。また、内庭部には壇上積基壇の外装を施した龍尾壇を設け、その上には高欄を設置している。また、龍尾壇上の幢竿を立てるための支穴を2基×4カ所設けており（図58）、第一次大極殿院においては、幢竿の発掘遺構の収集とともに、文献や絵図資料の検討が必要であり、龍尾壇上の高欄の有無についても検討しなければならない課題であることを改めて認識した。

回廊は、南門基壇の直近に脇門があるため、反りあがりをほとんど造っておらず、脇門の位置が構造と意匠に大きく関連している可能性がある。第一次大極殿院においても脇門の位置は重要な検討課題である。

復原された平安神宮は、建築細部の意匠などは古代の様式とはいえない部分が多く参考となる部分は少ない。しかし伊東忠太や木子清敬らの復原設計には数度の計画変更があり、初期段階では忠実な古代復原が試みられていたと考えられる。とくに幢竿の支穴や龍尾壇上の高欄は、設置するに至った経緯や参考とした資料について、具体的な根拠が判明すれば、今回の大極殿院復原研究において有用と考えられる。

故宮 故宮は紫禁城とも呼ばれ、明・清2代の皇宮であり、明の永楽4～18年（1406～1420）にかけて造営され、1911年まで皇宮として使われた。

故宮の中心建物は太和殿であり、平城宮大極殿院に相当する、太和殿周辺の諸施設と内庭部を中心に調査をお



図57 京都御所 紫宸殿前面 (南東から)



図58 平安神宮 龍尾壇上の幢竿の支穴 (北西から)



図59 故宮太和殿前面 高官の立ち位置を示す石列 (南東から)



図60 故宮 中軸線上の重層建物 (北東から)

こなつた。太和殿周辺の主な建物は、中軸線上には南から太和門・太和殿・中和殿・保和殿が建ち、太和門と太和殿を囲む塀と通路、太和門の両脇に開く昭徳門と貞度門、南面回廊の東西の両隅に建つ崇楼、東西の回廊に開く體仁閣・弘義閣・左翼門・右翼門、太和殿の両脇に開く中左門と中右門である。

太和殿は高欄の付く3層の基壇上に建ち、基壇中央の階段には雲竜の彫刻が施された御路をスロープ状に設けている。太和殿前面内庭部は、中軸線上に中央をむくらせた幅約4mの石を敷き、その両脇には斜めに配した磚や石をそれぞれ幅約1.2mに敷き、合計幅約6.5mの中央通路を設けていた。内庭部は全面磚敷としていたが、太和殿基壇の前面は約1.4m角の石を敷いて舗装を変えている。その範囲は、東西は正面に取付く3基分の階段幅、南北は體仁閣と弘義閣に取付く階段位置から太和殿基壇際までである。また、内庭部の磚敷のなかには、高官の立ち位置を示すという約1尺角の石を、太和殿の基壇に取付く中央階段の南端から太和門に取付く階段の北端ま

で約1.2m間隔で平面が南に開くハの字状に設け(図59)、さらに儀式の際は、仮設物として高官の立ち位置を示す品級を記した青銅製の版位を中央通路の両脇に置くという。第一次大極殿院の内庭部の遺構では、舗装については中央通路を画する南北溝の内外で明確な差はこれまで報告されていないが、故宮のように舗装を変えている例があり、そういった意識で地表面の高さを含めて再検討してやる必要がある。

故宮の舗装は、大極殿院相当施設の太和殿前面の内庭部だけでなく、その北に位置する乾清宮や慈寧宮などを中心とした院を構成する区画においても、それらの中軸線を非常に強調した造りになっている。また、故宮の中軸線上に建つ建物は重層である例が多く(図60)、太和殿周辺では、中和殿のみ単層であるものの、そのほかの太和門・太和殿・保和殿は重層であった。故宮の建物の多くは明・清時代のものが中心であり、このような屋根の形状や内庭部の舗装などが、いつの時代まで遡ることができるかは検討が必要である。(北山夏希)